



10月9日

女子球児 初代沖縄王者に



写真左から、佐藤山ななみ(西原南ファイターズ6年)
平安琉球・城間陽也(坂田ビクトリース6年)
洲崎夢叶・山里彩穂(西原南ファイターズ4年)

第1回沖縄ガールズトーナメント軟式野球大会(JAおきなわ旗争奪杯)において、中城・宜野湾ガールズ(西原・中城・宜野湾・北中城の混成チーム)として出場した児童が町役場を訪れ、初代王者となったことを報告しました。主将としてチームを率いた佐藤山ななみ投手は「決勝戦では先制されたが、チーム全体でムードを盛り上げて終盤に逆転できた」と笑顔を見せました。

10月4日

おとうさんの読み聞かせ



西原小学校の「朝の読み聞かせ」で、男性だけの「おとうさんの読み聞かせ」が行われ、児童の保護者や地域住民、教育委員の皆さんがそれぞれ選んできた絵本を工夫を凝らして読み聞かせました。おしゃべりで騒がしかったクラスが、読み聞かせが始まると一斉に静かになり、夢中になって聞き入っていました。新田繁陸さんはサンゴの実物を児童に触らせながら、恩納村のサンゴをテーマとした「サンゴのしま」を読み聞かせ、「児童が真剣に聞き入ってくれるので、やりがいがある」と笑顔を見せました。



わっしょい まちの話題



9月21日

100mで全国1位! 沖縄県勢初の快挙!



▲平田くん(右から2番目)とアスリート工房関係者

横浜市で行われた日清食品カップ第34回全国小学生交流大会において、男子5年100m決勝で平田瑛大くん(西原東小学校)が13秒08で初優勝しました。平田くんは3年生から陸上を始め、現在はアスリート工房に所属し週に2回の練習に励んでいます。大会を振り返り「会場と観客の歓声が大きくてドキドキした」と笑顔を見せました。諸久里武監督は、「足首のバネと本番で実力を発揮できる勝負強さを持っている。夢中で打ち込んでほしい」と期待を寄せました。上間明町長は「スポーツも勉強も文武両道で頑張ってください。将来が楽しみです」と激励しました。

諸久里監督(右から1番目)は世界マスターズ陸上競技選手権大会2018の男子400mリレー金メダリストです。

9月19日

ゆいレールを東海岸まで! 町民総決起大会



西原町まちづくり推進協議会・西原町・西原町議会・西原町行政自治会会長・西原町商工会共同主催による、ゆいレールの東海岸への延伸に向けた西原町民総決起大会がさわふじ未来ホールにて行われました。大会には約450人が参加し、ゆいレールを大型MICE施設が整備される東海岸地域まで延伸するよう、町民一丸となって関係機関に要請していくことを大会決議にて採択しました。

上間明町長は「MICEの成功には交通体系の整備が不可欠であり、もっとも有効な公共交通はゆいレール。MICE振興は100年に一度の大きなチャンスです。町民一丸となって頑張ってください。」と呼びかけ、会場は未来への期待と熱気に包まれました。

9月24日

小波津子ども獅子 お披露目



小波津伝統芸能保存会主催で、八月十五夜「獅子め御願」・「子ども獅子」のお披露目が小波津集落センターで行われました。同保存会は棒・獅子舞・組踊など地域伝統芸能の保全・継承に努めており、今年度は平成30年度沖縄県地域振興協会の地域活性化助成事業を活用し、「小波津区獅子舞(子ども獅子)担い手育成事業」として子ども獅子の作成に取り組んでいます。



▲デイゴ・桐・米ズギからできた獅子の顔

子ども獅子の頭部分は大工や芸能家がデイゴ、桐、米ズギで製作し、美術教諭が配色をデザイン、板金業者が彩色、獅子の毛を取り付ける網は漁師のおみこみ技術が使われるなど、小波津区民の人材と力を結集して作り上げています。

糸数月香さん(西原南小学校6年)は「去年から参加している。とても楽しい」と獅子を製作しながら笑顔を見せました。照屋拓屋さん(知念高校2年)は「自分の地域をもっと知りたくて参加した。小さな子どもと関われるのが楽しい」と語っていました。

当日は十五夜の月明かりの下、邪気を払い地域の発展を願い、棒と獅子舞が披露されました。子ども獅子を舞った牧野壮真くん(西原南小学校5年)は「緊張して、いつもより難しかったけど楽しかった」と嬉しそうでした。同保存会の糸数善昭会長は「地域の大人と子ども一緒になって一生懸命獅子を製作した。これからは楽しみ。」と将来の担い手たちを温かく見守っていました。

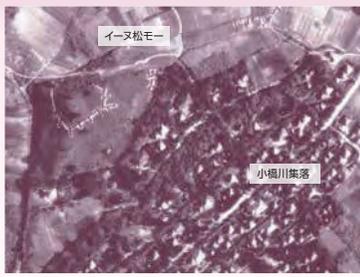


文化財 コラム

西原の道(その式 戦争の道)

西原の歴史と文化を語るうえで、沖縄戦の史実は欠かせません。

一九四五年四月の米軍撮影の写真には、旧日本軍が縦横無尽に構築した交通壕(塹壕)や陣地が確認できます。当時、小橋川集落の聖地である「イヌ松モ」には、旧日本軍独立歩兵第十一大隊の機関銃中隊が配備されていました。丘上を取り囲むように配置された各銃座は、交通壕や地下坑道、陣地壕で結ばれていたと思われれます。



米国国立公文書館所蔵

このような陣地は町内各地につくられ、現在でもその痕跡をみることができます。安室の交通壕跡と考えられる遺構の深さは、約九〇センチで地表との傾斜はゆる

やかです。旧日本軍の交通壕づくりは、用途や地形などによって深度や傾斜を変化させていたようです。沖縄戦における日本軍の巧みな陣地形成と戦術は、米軍の予想戦術期間の三倍(三カ月)の長期戦となり、米軍に「歩兵戦闘の極み」とまでいわせています。しかし、旧日本軍の壕構築には、西原の住民が老若を問わず招集され、作業にあたっていたことを忘れてはいけません。一九四四年一月一日の上空襲撃以降、翌年四月一日の米軍上陸までの間に、壕や飛行場建設が急ピッチで進められていきます。当時を知る人の手記には「牛馬の使役と何等変わるころがない。県民は戦闘開始前に殆ど疲労と衰弱で倒れるだろう」とあります。また「科学日本」と豪語している軍の陣地構築は、科学とは程遠いもの」とも述べています。「当時、老人や女性、子どもたちまで毎日陣地の構築にあっていた。そして兵隊たちは、攻撃や撤退のために、この交通壕を走り抜け、またはここで息絶えた。」資料をながめ、遺構を訪れるたび、戦争のために刻んでおきた道の歴史を、刻んでおきたいと感じています。



お問い合わせ 教育部 文化課 文化財係 ☎九四四-四九九八